

41372

教科書文庫

4
810
31-1929
25000.1 27884

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

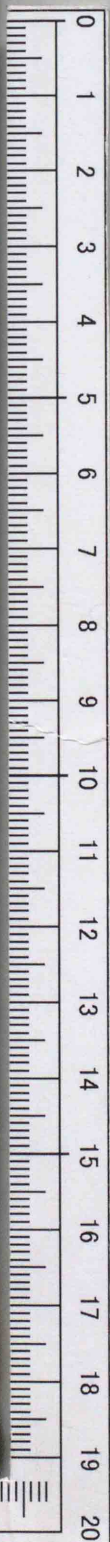


© Kodak, 2007. TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007. TM: Kodak



教科書文庫
4
810
31-1929
2500027884

T1A4
1H9
N-71



尋常 小學 國語讀本 卷十一

文部省



教科書文庫

4

810

31-1929

2500027884



小學常

國語讀本 卷十一



文部省

登録番号
27884
分 37598
類 M

広島大学図書

2500027884



目録

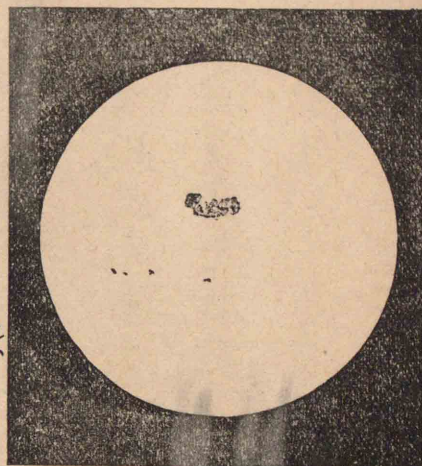
第一課	太陽	一	第十五課	人と火	六十五
第二課	孔子	四	第十六課	無言の行	六十八
第三課	上海	八	第十七課	松阪の一夜	七十
第四課	遠足	十一	第十八課	貨幣	七十七
第五課	のぶ子さんの家	十四	第十九課	我は海の子	七十九
第六課	裁判	十八	第二十課	遠泳	八十三
第七課	賤嶽の七本槍	二十三	第二十一課	曆の話	八十七
第八課	瀬戸内海	三十一	第二十二課	リンカーンの苦學	九十四
第九課	植林	三十五	第二十三課	南米より父の通信	百一
第十課	手紙	四十一	第二十四課	孔明	百十
第十一課	畫師の苦心	四十四	第二十五課	自治の精神	百十三
第十二課	ゴム	四十九	第二十六課	ウリントンと少年	百十七
第十三課	ふか	五十四	第二十七課	ガラス工場	百二十一
第十四課	北海道	五十九	第二十八課	鐵眼の一切經	百二十五

尋常小學 國語讀本卷十一

第一課 太陽

地球上に存在するもので、太陽の影響を受けぬものは一つもない。太陽の光と熱とがなくては、我々人間は勿論、あらゆる生物、一として生存することは出来ない。これほど我々に重大な関係のある太陽とは、一體どんなものであらう。一口にいへば、白熱の状態にある一大火球で、之を形造つてゐるものは、液體に近い氣體であらうといふ。さうして其のさしわたしは三十五萬四千里、即ち地球の百九倍餘りに當り、其の容積は地球の百

益 隨

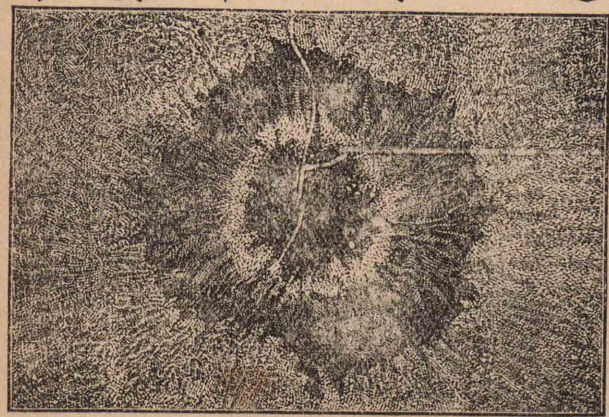


三十萬倍に當つてゐる。温度は表面で約六千度、内部に入るに随つて益、高い。光の強さに至つては非常なもので、之を燭光しやくでいへ

望 表

ば一三の下に零れいを二十六もつけて表さねばならぬ。

望遠鏡で見ると、太陽の表面は全部が一樣にかゞやいてゐるのではなく、光の強い部分もあれば弱い部分



黒

もあり、又所々に黒點といつて黒く見える所もある。此の黒點は多分表面に生ずるうづ巻であらうといふ。さうして其の數や大きさは、凡そ十一年餘を週期として増減してゐる。

ところが此の大きな太陽も、夜の空に銀の砂をまいたやうに見える小さな星の一つと同じものだといふ。つまり此の宇宙うちうには、あの太陽のほかにも、これと同じやうなものがある。數限りもなく存在してゐるが、たゞ其の距離きよの遠いために、あんなに小さく見えるのである。しかも我々に最も近いあの太陽でさへ、地球からは凡そ

離

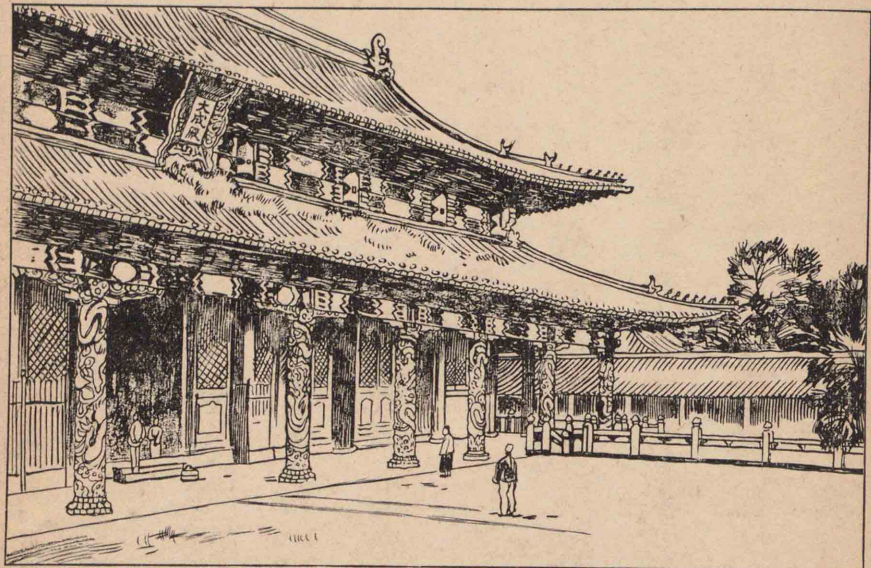
三千八百萬里も離れてゐる。今かりに一時間五十里の速度で飛ぶ飛行機に乗つて行つたとしても、太陽に到着するには八十七年かゝるのである。

第二課 孔子

聖敬 德化 著 勵 績

支那幾千年の人物中、大聖として長く後人に敬はれ、徳化の尚今日に著しきもの、孔子に及ぶはなし。孔子は今より凡そ二千五百年前、當時の魯即ち今の山東省の地に生れたり。少時より學問に勵み、長じて後魯の君に仕へ、大いに治績を擧げしかども、奸臣の爲にさまたげられ、久しく其の職に居ることあたはずして魯を去りぬ。

治 專 著述



當時支那は數國に分れて互に相争ひ、戰亂止むことなかりしかば、孔子大いに之をうれひ、如何にもして國家を治め、萬民の苦を救はんものと、廣く各國をめぐりて、用ひられんことを求めぬ。しかも遂に志を達することを得ざりしかば、老後は専ら力を教育と著述とに用ひたり。門人三

千人、其の最もすぐれたるもの、顔淵、曾參、有若等七十二人なりき。

弟 集 録 述 非

論語は、曾參と有若との門人等が孔子及び其の高弟の言行を集録したるものにして、最もよく此の大聖の面目をうかゞふを得べし。今此の書によりて其の一端を述べん。

孔子は正義の念強き人なりき。其の言にいはいはく、富貴は人のねがふ所なり。然れども正しき道によるに非ざれば、我之に居らず。貧賤は人のいとふ所なり。然れども正しき道によるに非ざれば、我之を去らずと。

貴 可 及 簡 自 老 將

孔子常に中正不偏を貴び、中庸は徳の至れるものなり。といひ、過ぎたるは及ばざるが如し。ともいへり。又きはめて學問に熱心にして、其の好學の念の切なる、朝に道を聞くことを得ば、夕に死すとも可なり。といふに至れり。

孔子は他人を正す前に先づおのれを正し、近きより遠きに及すを以て其の主義としたり。おのれを修めて人を安んず。とは、彼が簡明に此の意をあらはせる語なり。かつて自らいはいはく、發憤しては食を忘れ、楽しんではいれひを忘れ、老の將に至らんとするを知らず。と。其の身

を忘れよはひを忘れて、人生の爲に盡くしたる大聖の面目、よく此の語にあらはれたりといふべし。

第三課 上海

長崎を出た汽船は、海上を走ること約四百海里で揚子江の河口に達する。それから五十海里ばかりさかのぼつて、黄浦江といふ支流に入り、更に十海里餘りさかのぼると、其の西岸にある上海に着く。

上海は支那第一の貿易場で、百萬以上の人口を有する大都會である。こゝには外國人の居留する者が非常に多く、これ等は租界といふ特別の区域内に住んでゐる。

江 崎
居 租 區

制 布 皮 俗
膚 膚

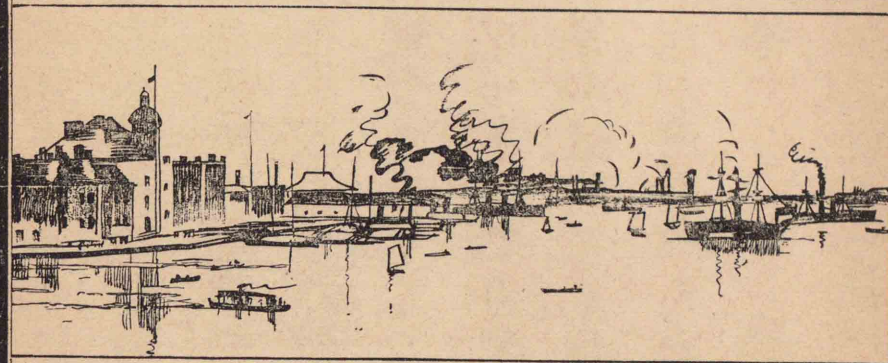
絶 縦 横

博 圖 競

租界といふのは居留地の一種で、居留民が支那政府の手を離れて、自治制を布いてゐる處である。

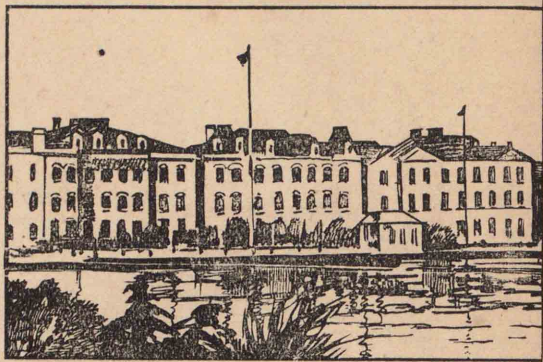
租界には皮膚の色の違ひ、言語風俗の違つた幾多の種が入交つてゐるので、其の有様は一見世界人種の展覽會のやうである。市街の様子も支那風ではない。アスファルトや石を敷いた道が縦横に通じ、電車馬車自動車等が絶間なく往來してゐる。街路をさしはさんで大商店が軒をつらね、河岸には領事館税關を始め、銀行會社等のりつばな建物がそびえてゐる。其の外各種の學校や、博物館圖書館等の修養機關、公園競馬場劇場等の娯

狭 趣 臨 延 占



樂機關が到る處に散在してゐる。租界の外に出ると大ていは支那風の町で、町幅も狭く、あまりきれいでない。唯商業の取引の盛な部分は、相當に活氣を帯びてをり、西洋風の建物もあつて、趣がやゝ變つてゐる。上海が黄浦江に臨む部分は延長八哩、六十餘の波止場はとばがある。此の地は交通上重要な位置を占めてゐて、外國との貿易ばかりでなく、支那の各地との取

粉



引にもきはめて便利であるから、港内には常に數百隻の船が集つてゐて、頗る壯觀である。貿易上最も重要な關係をもつてゐるのは、日英米三國で、我が居留民の數は、外國人中第一位を占めてゐる。

上海は専ら商業の都市として知られてゐるが、近時工業も次第に盛になつて、紡績造船製粉製紙其の他の諸工場が勢よく黒煙を立ててゐる。

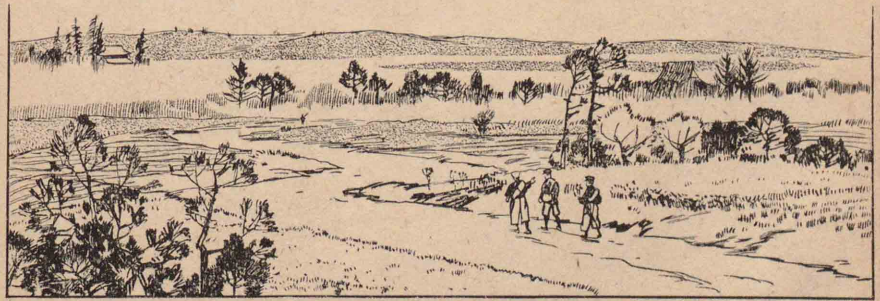
第四課 遠足

一

鳴くやひばりの聲うらゝかに、
かげろふもえて野は晴れわたる。
いざや、我が友うち連れ行かん。
今日はうれしき遠足の日よ。

二

右に見ゆるは名高き御寺、
左に遠くかすむは古城、
春は繪のごと我等をめぐる。
今日はたのしき遠足の日よ。



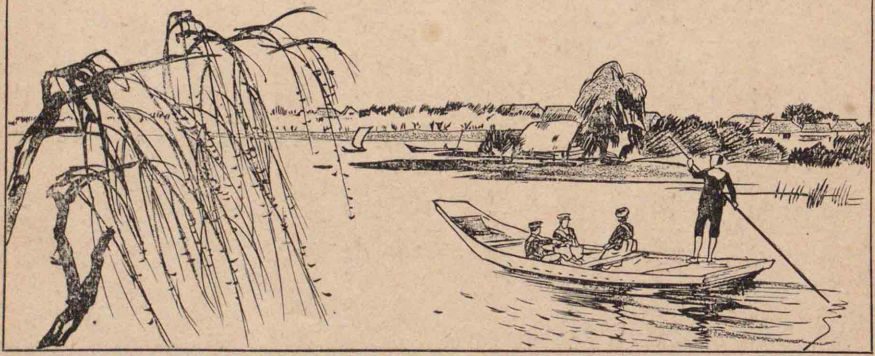
桃何處

三

たどりつきたる峠の上に、
菜の花にほふ里見下して、
笑ひさゞめくひるげのむしろ。
今日はうれしき遠足の日よ。

四

風は音なくやなぎをわたり、
船は静かに我等をのせて、
行くは何處ぞ、桃さく村へ。
今日はたのしき遠足の日よ。



第五課 のぶ子さんの家

今日は、のぶ子さんのうちへ始めて遊びに行きました。通された部屋には、古いたんすや戸棚などが並べてありましたが、さうぢもよく行届いてゐるし、總べてがきちんとしてゐました。

のぶ子さんはちやうど、五年生の時の成績物に表紙をつけて、とちていらつしやる所でした。三月の末になさるはずであつたのが、お取込があつたため、今まで延びてゐたださうです。私が來たので、すぐしまはうとなさるのを強ひて止めてお手傳をしましたが、成績物を

一枚も無くなさずにそろへていらつしやるのに驚きました。のぶ子さんは、成績物が返るとすぐ紙の袋へ入れておいて、學年の終におまとめになるのださうです。一年生の時からの成績物も見せていたゞいて、其の始末のよいのに感心してしまひました。成績物は一つ一つ自分の力のこもつたもので、皆一生の記念になるのだ。と思ふと、私も急に一年からのをまとめたくなりましたが、私のは置場所をきめておかなかつたので、大方なくなつてしまひました。

「本や帳面はどうしていらつしやいますか。」

と尋ねてみると、のぶ子さんは上の棚を指さして、

「あすこに全部學年別にしてのせてあります。」

とおつしやいきました。成程、かういふ風に分類してそろへておけば、いつ取出すのにも便利だ。と思ひました。私は學校で習ふ本でさへ時々見失つて、大きわぎをすることがあります。こんなによく整頓してゐる中で勉強したら、どんなに氣持がよいだらう。と思ひつゞけてゐると、そこへ弟さんが雑誌を二三さつ持つて來て、本棚に並んでゐる雑誌の間へそれぐお入れになりました。聞けば、雑誌の類は號の順に並べておいて、取出した

ら後できつともとの場所へお入れになるのださうです。弟さんまでが、あんなに氣をつけていらつしやるとは實に感心なことです。

しばらくたつと、おかあさんが臺所の方から、モスリンのふろしきを持つておいで。とおつしやいきました。のぶ子さんはすぐたんすの小引出から取出して、持つていらつしやいました。見れば引出にはみんな札がはつてあつて、ふろしき「ハンケチなどと一々書いてあります。此の一事で、家の中がどんなによく整頓されてゐるかが想像されます。

體

お暇してから、私はひとりて歩きながら自分の始末の
わるいことを考へて、つくづく恥づかしくなりました。
「これまで自分の不整頓のために、むだに費した時間と
労力は大きなものであつた。整頓といふのは體裁をつ
くることではなくて、むだをなくすことだ。」と思ひまし
た。

第六課 裁判

約束は固く守らなければならぬ、他人に害を加へては
ならぬなどといふことは、我々が十分心得てゐる事だ
である。しかし大勢の中にはそれを守らない人もある。例

聽 張 借 互

犯

へば、借りた金を返す約束の日が來ていくら催促され
ても、返さない人がある。其の場合に貸主から借主を裁
判所に訴へると、裁判所は兩者の言分を聽いた上で、貸
主の主張を正當とみとめれば、其の借金を返すやうに
借主に命ずる。此のやうに、人々相互の間の訴訟を裁判
するのを民事裁判といひ、訴へた方を原告、訴へられた
方を被告といふ。

又他人の物を盗んだといふやうな犯罪があつた場合
には、國家は其のやうな不法な行が再びされないやう
に、其の犯罪者をこらし、又世間の人々のいましめにも

罪 刑罰 疑 檢 處 件

せねばならぬ。ところで、どういふ事をすれば罪になるか、其の制裁としてどのやうな刑罰を受けるかは、法律で明かに定めてあるから、裁判所は、犯罪の疑のある者を十分に取調べて適當公平な裁判をする。此の犯罪者を罰するため、裁判を刑事裁判といふ。此の場合には、訴へられた者が被告で、檢事といふ國家を代表して犯罪者の處罰を求め、役人が原告に當るのである。裁判所は國家が設ける機關で、これに區裁判所、地方裁判所、控訴院、大審院の四階級がある。裁判は事件の輕重によつて、最初區裁判所又は地方裁判所で行はれる。

組織

添

ところで、區裁判所の裁判に不服な者は地方裁判所に上訴し、尚其の裁判に不服な者は更に大審院に上訴する。又地方裁判所で行はれた最初の裁判に不服な者は、控訴院、大審院にと順次に上訴する。かういふ風に、三回くりかへして裁判してもらふ事の出来る組織になつてゐるのは、つまり裁判を念入にするためである。裁判を行ふのは判事の職務であるが、刑事裁判では、人から擧げられた十二人の陪審員ばいしんが事實の判斷を下す場合がある。又民事裁判では、原告被告の相談相手、附添人又は代理人となつて其の主張を助け、刑事裁判で

は、不當な刑罰が加へられぬやうに被告を保護するた
めに辯護士といふものがある。

裁判の目的は、決して人を争はせ、又は人を罰すること
ではない。此の世を不道理や罪惡の行はれない、平和な、
秩序正ちつじよしい世の中にするのが其の目的である。若し裁
判が無いとしたら、人々相互の争がはてしなく行はれ
て、しかも其の争は、力の強い者やわるがしこい者が勝
つことになるであらう。若し又裁判が公平に行はれぬ
としたら、せつかくの法律もねうちが無くなり、我々は
安心して生活することが出来ぬ。裁判は實に正義保護

極

率 初解

督

のための大切な仕事であり、判事、検事、辯護士及び陪審
員の任務は極めて重大なものといふべきである。

第七課 賤嶽の七本槍しづがたけ

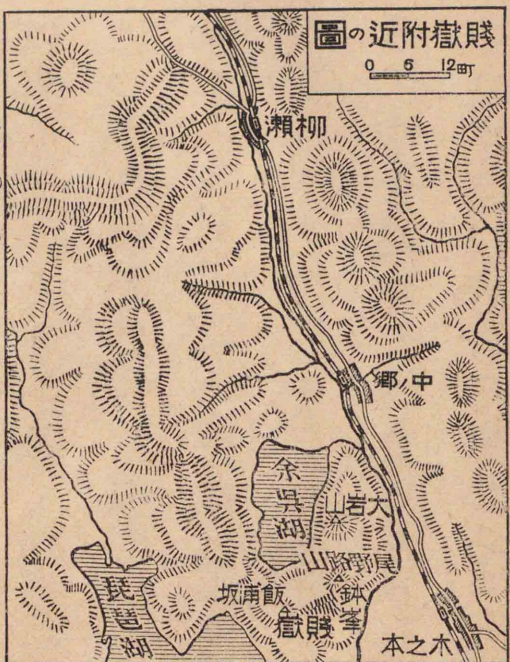
春は来りぬ。越路こしぢの雪も解初めたれば、柴田勝家しばた、先づ佐
久間盛政くまもりまさむねをして一萬五千の兵を率ゐ、近江あふみの柳瀬やなぎせに討
つて出でしむ。待ちまうけたる秀吉ひでよしは、琵琶湖びばはのほとり
に十三箇所のとりでを構へ、諸將を配置して防備をさ
をさ急なし。やがて勝家また自ら五萬の兵を督し、来り
て盛政の軍に合す。

時は天正十一年四月二十日のあかつき、十三箇所のう

軍 斬 筋 冷 際

ちなる大岩山のとりてより、幾頭かの馬をひきて余呉湖うみのほとりに下り來れる七八人の兵卒あり。水際に寄りて馬の足を冷さんとする折しも、思ひもよらぬ敵の一隊、湖に沿ひたる一筋路を急ぎに急ぎて進み來る。あわてて逃げんとすれども時既におそく、大方はやにはに斬倒されたり。

危く逃延びたる一二の兵卒は、せもどつて急を告ぐれば、とりでの守將中川清秀、士卒を指揮して防ぎ戦ふ。されども不意を討たれし俄の軍に、清秀等の奮戦其のひなく、清秀は討死してとりでは落ち、戦は午前のうち



に終りぬ。

寄手の大將佐久間盛政は、今日の戦に勝ちほこり、明日は進んで賤嶽のとりてをおとし、一擧に敵をみぢんにせん、と、自らは尾野路山おののろに野營し、大岩山鉢峯などの要所々々にそれぐ、將卒を配置したり。

夜ふけに及んで、鉢峯を守れる兵卒の一人、ふと東南の方を望み見るに、美濃路みのの方面に當りて、たいまつまつの光

直之 新算

おびたゞしく、何とも知らぬ物音ぎわくとして夜の
 静けさを破る。こはたゞ事ならじと、尾野路山の本營に
 急報すれば、盛政直に物見の兵を出してうかゞはしむ
 るに、こは如何に、降つてわいたる敵の大軍、木之本の邊
 に満ちくたりと報じ来る。味方は今日の戦に將卒共
 につかれ果てて、物の用に立つべくもあらず。此のまゝ
 新手の兵を迎へては、萬に一つの勝算もなし。盛政は勝
 つてかぶとのををしめざりし油斷を悔いつゝ、俄にや
 みの中を退却しはじめたり。
 木之本には秀吉の來れるなり。これより先、秀吉は織田

おだ

食 旨

信孝のぶたかを攻めて大垣にありしが、二十日の正午大岩山の
 敗報至る。あたかも晝食の膳ぜんに向ひ居たる秀吉は、持ち
 たる箸を投捨てて、すは勝つたるぞ。と手を打つて喜び、
 先づ五十人の兵に旨をふくめて先發せしめ、やがて將
 卒のそろふをも待たず、者ども續け、と馬にむちうつて
 近江に向ふ。五十人の兵は行くく百姓をつのり、かゞ
 り火をたかせ、糧食りやうじきの用意をなさしむ。夜に入れば、見渡
 す限りのかゞり火晝をあざむく中を、一萬五千の軍勢
 まつしくらに進軍して、夜半の頃には既に木之本に到
 着したり。

追

二十日の月は上りぬ。退却軍は少しく之にたよりを得たれども、秀吉の軍は、此の時既に處々のとりでより來れる守兵と合して、追撃すること頗る急なり。明くれば二十一日の朝、盛政は賤嶽より西北に當れる高地に兵を引きまゝとめたりしが、此の時までも飯浦坂はんのうらにふみ留つて、追來る敵を防ぎ居し。弟勝政に引きあげを命じたり。今まで賤嶽の山上より、また、きもせず戦況を見居たりし秀吉、勝政の引足になりたるを見て、すかさず鐵砲組に合圖して銃火をあびせかけたれば、敵は見る間にばたくと倒れて、一軍今や崩れんとす。

況

武

秀吉はるかに之を望み、旗本の若武者どもをきつと見て、

「てがらは仕勝ちぞか、れく。」

音聲

と大音聲。

承る。

と、福島正則まさのり加藤清正よしあきら同嘉明なが平野長泰やすわきぎ脇坂安治やすはる糟屋武則かつもと片桐且元かつもと等の荒武者ども、勇みに勇んで突進す。

突桐

中にも加藤清正は、山際のがけ路にて敵將山路正國に出であひ、片鎌槍をしごいて突いてかゝる。正國も槍を

突

合はせ、しばらく防ぎ戦ひしが、俄に槍を投捨てて大手

押 伏 拔



正やがて正國をねぢ伏せたり。ねぢ伏せられながら正國、清正がよろひのすそをしつかとつかむ。清正刀を抜かんとするに、かぶとのしころつゝ、じの枝に引つかゝりて、身のはたらき自由ならず。正國得たりと、力足をふ

をひろげ、

組打。

と叫ぶ。直に組合ひたる二人の勇士、ねぢ合ひ押合ひ争ふうちに、清

轉

稱

ん張りてはねかへさんとせしが、ふみそこねてあはや谷底へ轉び落ちんとす。清正手早くかぶとのをを切つたりければ、かぶとはつゝ、じの枝に残つて、二人はしつかと組みたるまゝ、ころくゝと轉び落つること三十間許。

正國の首は終に清正の手に入りぬ。

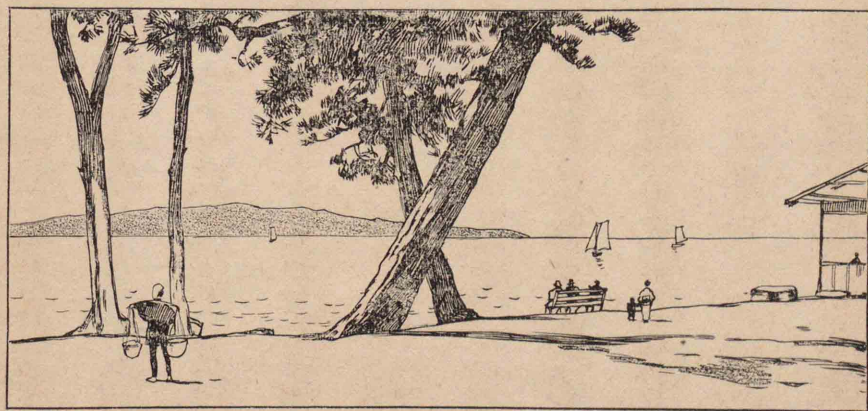
福島正則以下の六人、またそれぐゝに名ある勇士を討取つて、武名を天下にとゞろかせり。武器は皆槍なりしかば、世に之を稱して賤嶽の七本槍といふ。

第八課 瀬戸内海

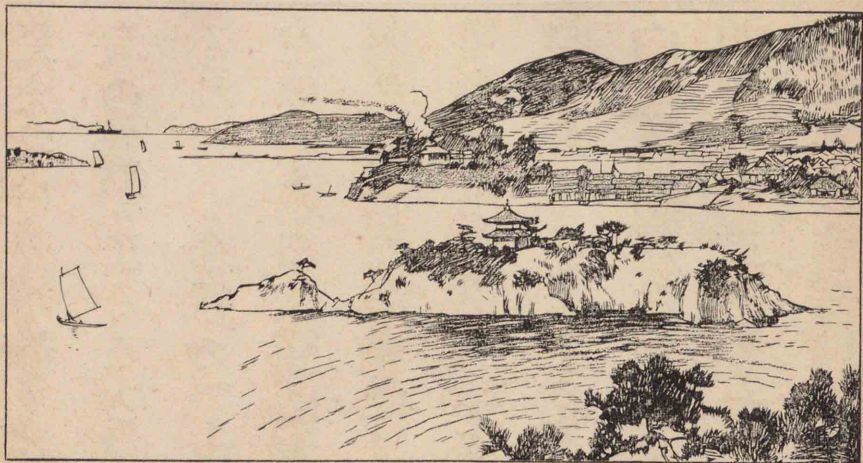
接 關

本土の西、近く九州と相接せんとする處、下關海峡あり。四國の西には佐田岬長く突出で、九州にせまりて豊豫海峡をなす。淡路島の東端、本土と相望む處、紀淡海峡となり、四國に近き處、鳴門海峡となる。此の四海峽に包まれたる細長き内海を瀬戸内海といふ。

瀬戸内海には、到る處に岬あり、灣あり、大小無數の島々各所に散在す。船



未 廻 覺



の其の間を行く時、島かと見れば岬なり。岬かと見れば島なり。一島未だ去らざるに、一島更にあらはれ、水路きはまるが如くにして、また忽ち開く。かくして島轉じ、海廻りて、其の盡くる所を知らず。春は島山かすみ、に包まれて眠るが如く、夏は山海皆緑にして、目覺むるばかり鮮かなり。兩岸及び島、見渡す限り、田園よく開けて、毛

鏡 没 古 興

氈せんを敷けるが如く、白壁の民家其の間に點在す。
 海の静かなることは鏡の如く、朝日夕日を負ひて、鳥が
 くれ行く白帆の影ものどかなり。月影のさびなみにく
 だけ、漁火の波間に出没する夜景もまた一段の趣あり。
 瀬戸内海の沿岸には大阪神戸尾道うじな宇品高松多度津たどつ高
 濱等良港多く、汽船絶えず通航して、遠く近く黒煙の青
 空にたなびくを見る。
 内海の沿岸及び島々には名勝の地少からず。嚴島いづしまは古
 より日本三景の一に數へられて殊に名高く、屋島やのしま壇浦
 は源平の昔語に人の感興を動かすこと甚だ切なり。我

國十一

障

一昨年

が國に遊べる西洋人は此の瀬戸内海の風景を賞して、
 世界における海上の一大公園なりといへり。

第九課 植林

障子をあけてみるとまだ雨が降つてゐる。これでは明
 日の山廻りはだめだ。と思ひながら、机によりかゝつて
 向ふの方をながめると、うねく〜と續く岡が雨に煙つ
 て、ぼんやりと遠く見える。あそこは一昨年植付をした
 地藏山だ。と思ふと、山の背を通つてゐる小路の中には
 さんで、四五尺にのびた杉の若木が勢よく立並んでゐ
 るのが、目に見えるやうな氣がする。

伐

苗峯

「あそこの植付をした時はまだ寒かつた」と思ひ出しな
 がら、さつきおとうさんのいひつけて、明日の用意に出
 しておいた植林地の書付を開いて見る。地圖の中の薄
 緑に染めてあるのが一昨年植付けた處、朱線で圍んで
 あるのが今年伐採する處、それから次々といろくくの
 印がついてゐる。

「地藏山の内、二町三段五畝、峯通り檜苗、其の他總べて
 杉苗一坪一本の割。」

とおとうさんの手で記してある。一昨年植付けた時の
 覺書だ。あの時、

「こんな間に間を置いてよいのですか。
 と僕が聞いたら、おとうさんが

「早く間伐して細材を取る目的のところでは、一坪に
 二本も三本も植ゑるが、此の邊では太材を取る方が
 利益だから、かう間を置いて植ゑるのだ。今に御らん、
 此のくらゐ離して植ゑても、十五六年目には間伐を
 しなければならぬやうになるから。」

といつて笑つてをられた。

植付けた苗木の枯れた處へ補植をするのは、翌年一回
 だけだといふから、今年はもうしなくともよいのであ

斜

らう。下刈かりはいつも土用中にするので、ずるぶん苦しいが、それでも木が競争するやうに、しんを立てて、すくすくと延びてゐるのを見ると、非常にうれしい。木でも見下されるのがいやなのか、斜面などに植ゑた木は、低い處にあるもの程早く大きくなつて、こずゑの差が段々少くなつて行くのも面白い。

伐

毎年春の初か冬の半ばにする枝打は、面白いものだ。なたや鎌などで、つる草を拂ひ、下枝を伐落して行くと、今まで両方の枝と枝と組合つてゐたのが急に間がすいて如何にも氣持よささうに見える。いつかにもいさん

國十一

髪

が、

「杉の散髪だ。」

といつてみんなを笑はせたことがある。おとうさんのお話によると、枝を打て



節

ば、山火事の危険を防ぎ、又空氣の流通がよくなつて蟲がつかなくなるさうだ。それから始めて聞いて面白いと思つたのは、枝打をしないと木に節が出来ることである。生きた枝でも枯れた枝でも、其のまゝにしておくと、木が太るにつれて其の枝を包んで行くために、其處

が節になるのだといふ。

僕がお手傳して植ゑたあの杉や檜は、何時になつたら
伐るのだらう。使ひみちによつて、三十年目から五六十年
目ぐらゐの間には伐るのださうだから、一番早く伐る
としても、其の時は僕がおとうさんくらゐの年になつ
てゐるわけだ。今年伐るはずのは、おとうさんの子供の
時植ゑたのだといふが、もう幹のまはりの三尺餘りも
あるものが大分見える。おとうさんは、よく「植林は貯金
のやうなもので、植ゑてさへおけば、年々太つて利息が
附いて行く。」とおつしやるが、ほんたうにさうだ。

ぼんやりいろくの事を考へてゐるうちに、いつか夕
方の色が四方にたゞよつて、向ふの山も薄墨色に暮れ
て行く。あ、西の空がほんのり明るい。明日は晴かも知れ
ない。

第十課 手紙

音

拜啓。久しく御無音に打過ぎ、失禮仕候。さて昨
日御地より歸村せられたる河井氏の御話に
よれば、貴兄には去月以來御病氣にて、しかも
一時は大分御重態たいなりし由、誠に意外の事に
驚入候。しかし此の頃は、餘程御快方に向はれ

祈

宜田
舍

宜計
納

候とか。何とぞ十分御養生ありて、一日も早く御全快なされ候様切に祈り申候。御承知の通り當地には温泉これあり、病後の保養には特に宜しき由に候。何分田舎にて萬事不便には候へども、若し御光来相成候はば、及ぶ限りの御便宜相計り申すべく候。尚當地産の葛粉くず少少御見舞の印までに御送り申上候間、御受納下され度候。先づは御見舞までかくの如くに御座候。敬具。

五月五日

馬場要助

構

心地

衰肺
幸

仰
從

春田延太郎様

拜復。御親切なる御手紙有難く拜見仕候。尚又結構なる葛粉御送り下され、御厚情の程深く謝し奉り候。實は去月十日頃より感冒ぼうの心地にて引きこもり居候處、其の後とかく病勢衰へず、遂に肺炎えんを引起し申候。しかし幸に経過良好にて、熱も凡そ二週間餘にて全く相去り申候。今少しく日もたれば、轉地するもよからんと醫師も申居候に付、或は仰に従ひ、其中御地へ参り候やもはかり難く候。其の節は何

とぞ宜しく願上候。先づは取りあへず御禮まで。拜具。

五月八日

春田延太郎

馬場要助様

第十一課 畫師の苦心

昔、泉州堺さかひのなにかし寺に、或畫師久しく寄食してありけるが、何一つ畫がくこともなく、毎日遊び暮して既に數年を経たり。住持は心得ぬ事に思ひて、或日其の畫師に、

「君は畫を以て一家を成せる人なるに、數年の間一度

衣費

技

愚

過

も筆を取り給ひし事なし。我もとより衣食の費をいとふにあらざれど、何時までもかくておはすべきにあらねば、今は何處へなりとも行きて君の技をふるひ給へ。愚僧も所用ありて京に上り、或は一二年滞在せんもはかり難し。」

といへば、畫師

「そはいと名残をしき事なり。さらば謝恩の爲に何か畫がきて參らすべし。」

とて、心構せし様なりしが、尚筆も取らで數日を過しぬ。或夜小僧、住持の居間に來りて、

彼處

「彼處に行きて、彼の畫師のする様を見給へ。」

とさゝやきければ、住持ひそかに行きて見るに、畫師は障子に身を寄せて、様々に姿を變へつゝ、寢起する様なり。さまたげせんも心なしと思ひて、住持は其のまゝ、寢間に入れり。

獨 寢 妙凡筆

翌朝畫師は常にもあらず早く起出で、ふすまに向ひてしきりに筆を動かしたり。其の畫がく所皆鶴つるにして、筆勢非凡、丹青の妙言ふべからず。かくて次の夜は如何にとりかゞふに、畫師は前の如く夜もすがら寢ねずして、明日はかく畫がかんなど獨言してゐたりければ、住

更

持は尚知らぬ顔して過ししに、十日餘りにして、ふすまの鶴は二十四五羽となりぬ。其の後又夜更けてうかゞひ見れば、今度はひぢを張り、足をのべ、手を口に當てて鶴の卧ふしたる様をなせり。夜明けて住持、畫師に向ひて、
「今日かき給はん鶴の姿はかやうなるべし。」
と、夜中に畫師のしたる様をまねて見するに、畫師驚き

問

「我が心に思ひ構へし事を如何にして知り給へるか。」
と問ふ。住持

「昨夜のぞき見て知りたり。」

言

此の一言を聞くや、畫師又かのふすまの鶴に筆を取らず、唯杉戸に檜ひのみ一本を畫がきて東國へ出立しぬ。未だ一月もたゞざるに、かの畫師は突然歸り來れり。住持驚きて、

「東國へ行き給ふと聞きしに、今又此處に來られしは何故ぞ。」

と問へば、畫師

「先に畫がきたる檜、何となく物足らぬ所ありて氣にかゝりしが、東國へ下る路すがら、箱根山中にてよき枝ぶりの檜を見て、其の意を得たれば、かき添へんた

管 消形

めに歸りしなり。」

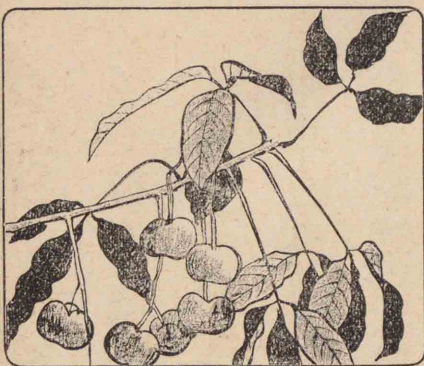
とて一枝かき添へ、又別れを告げて立去れりといふ。

第十二課 ゴム

自動車自轉車のタイヤ、ゴムまり、ゴム人形、消しゴム、ゴム靴、ゴム管、ゴム風船など、數へてみると、ゴムで造つたものは實に多い。一體、ゴムは何からどうして造るのであらうか。

ゴムは、熱帯地方に産する或植物からとる白色の液えんきを原料として、製造したものである。此の液の取れる木を普通にゴムの木といつてゐる。これには種類が多く、一

激



番よいのはパラゴムといふのである。今日世界におけるゴムの大部分は、此の木から取つたものである。此の種のゴムが、昔主として南米ブラジルのパラ州から産出したので、パラゴムの名が生じたわけである。ブラジル邊でゴムを製造するには、山野に自生するゴムの木から原料をとるのであるが、近年ゴムの需要が激増したために、英國人はマレイ半島の領地にパラゴムの木を移植するに至つた。他の國人も之にならつて、南洋におけるゴムの栽培

森

は頗る盛になつた。南洋は一年中温度が高く、雨量が多いので、ゴムの木の發育には最もよく適してゐる。マレイ半島マレー蘭領東印度等には、日本人の經營してゐるゴム園もたくさんにある。

此の邊でゴムを栽培するには、先づ森林を焼拂つて、其のあとに種をまくか、又は苗木を植付けるのであるが、これが成長して、切付を行ふまでには五六年もかゝ



傷 練 元 乳

る。其の間草をとつたり、虎や象の荒しに來るのを防いだり、苦心はなかく一通りでない。切付といふのはゴムの木から液をとるために、木の幹に小刀で傷をつけることをいふのである。切付には餘程熟練を要する。元來ゴム液は、幹の皮部と木質部との間にある乳管組織といふ所から出るのであるから、此の組織の所まで小刀が届いて、しかもそれより深くは傷のつかないやうにしなければならぬ。此の傷から出て來るゴム液は、流れて下のコツプにたまるのである。

除

切付をして廻る。それがすむと、今度はバケツを持つてコツプにたまつた液を集めて歩くのである。集めた液は之を工場に持つて行き、先づこして不純な物（じぶん）を取除き、次に藥品を入れて固まらせ、機械で薄くにして乾かすのである。

こゝまでが原産地における仕事である。かうして出來たゴムは、各國の工場に運んで加硫法（リウ）を行ふ。加硫法とは、ゴムに硫黄（ゆわう）をませる事で、かうするとゴムが非常に弾力を増して來る。之をそれぐ用途に應じて、更に加工するのである。

電氣の機械や、万年筆の軸などに用ひるエボナイトといふものもゴムから造る。近來床の敷物や、道路にもゴムを用ひることが行はれて來た。

ゴムの用途は、年を追うて益、廣くなるばかりである。

第十三課 ふか

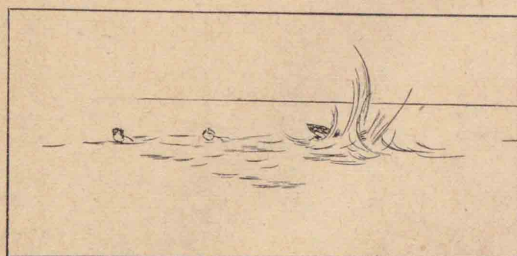
昔、アフリカの或港に一そりの船がとまつてゐた時の話である。

熱帯の暑さにたへかねてゐた船員等は、船長から泳を許されたので、我先にと海に飛込んだ。船には船長と老砲手だけが残つてゐた。

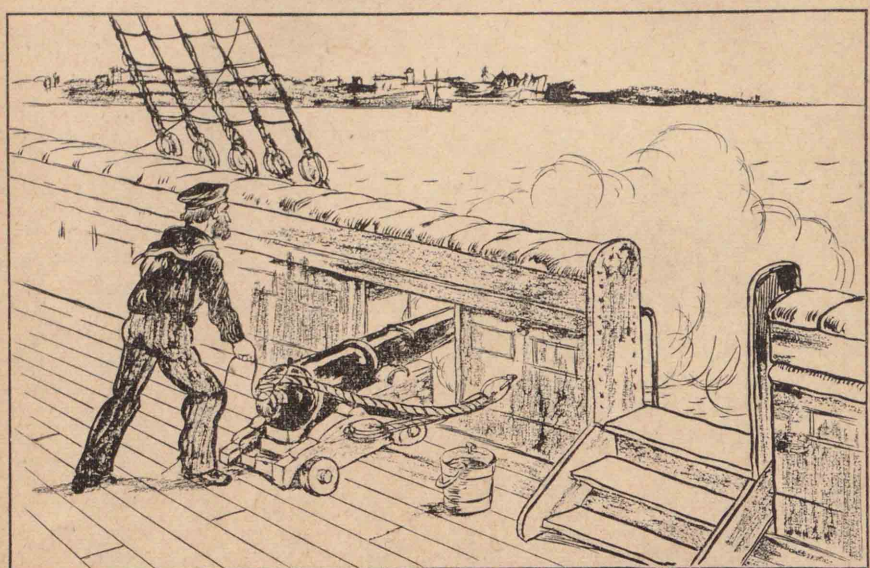
船員等は、如何にも氣持よきさうに泳ぎ廻つてゐたが、中にもうれしさうに見えたのは、十三四になる二人の少年であつた。二人は外の者からずつと離れて、沖のうきを目當に泳ぎくらをしてゐた。一人は老砲手の子である。初は二十メートル以上も相手をぬいてゐたが、どうしたのか急に相手にぬかれて、三四メートルも後れてしまつた。これまでにこくしてながめてゐた老砲手は、急に氣をもんで、「しつかりしろ。負けるな」と、甲板からしきりに勵ました。

ちやうど其の時、「ふかだく」といふ船長のけたまひ

夢



い叫び聲が聞えた。老砲手が驚いて向ふを見ると、船から三四百メートルの處に、大きなふかの頭が見える。人は叫び聲に驚きあわてて、我先にと船へもどつて来る。しかし二人の少年はまだ知らないらしい。老砲手は氣ちがひのやうになつて、「逃げろく」と聲を限りに叫んでゐるが、二人の耳にははいらぬのか、夢中で泳ぎくらを續けてゐる。救ひのボートは下された。しかしとても間に合ひさうもない。其のうち二人はふかの來るのに氣がついた。驚いて一しやうけ



んぬい逃げようとしてあせつてゐるが、もう遅い。ふかははや十數メートルの近くにせまつてゐる。ものすごい程青白くかはつた老砲手の顔には、決心の色が浮んだ。つと大砲のそばへ寄つて、急いで弾丸をこめ、ねらひを定めた。ふかの口はもうほとんど子

供に届いてゐる。

「あつ」と思はず人々が叫んだ。とたんはずどんと一發すさまじい大砲の音がとゞろき渡つた。

砲手はその結果を見るのをおそれるやうに、手で顔をおほつて大砲の上につつ伏した。

立ちこめた砲煙の薄れゆくにつれて、先づ目に入つたのは、大きなふかの死體であつた。

喜の聲はどつと起つた。

二人の少年はボートに乗せられて歸つて来る。老砲手は大砲にもたれて、無言のまゝじつとそれを見つめて

果 煙

ゐる。

第十四課 北海道

札幌

札幌さっぽろに来て先づ感ずることは、街路が真直で幅の非常に広いことである。市街は此の真直な路によつて碁盤ごばんの目のやうに正しく割られてゐる。主な通にはアカシヤの並木が青々と茂つてをり、市街の中央を東西に貫ぬく幅六十間の大通は、むしろ公園ともいふべきもので、花壇だんが設けてあり、銅像なども立つてゐる。未開の土地を切開いて、思ふまゝに設計して造つた町であるか

直 西 貫 未

模

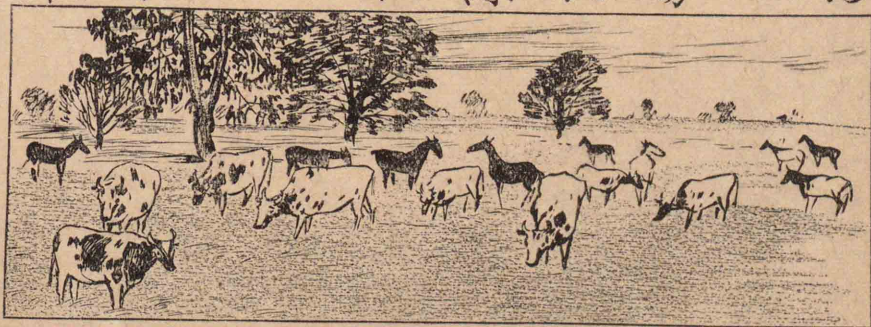
放牧

緑

ら、總べてが大規模でのびくとしてゐる。
 市外の眞駒内及び月寒には、大きな牧場がある。見渡す限り果もない原野に、放牧の馬や牛がいろいろと草をはむ様や、緑草の間に羊の群をなして遊ぶ様は、實にのどかである。

狩勝の展望

瀧川から根室行の汽車に乗ると、約五時間後に石狩と十勝の境にある狩勝の峠



國十一

抜

暗

如

恐

浪

折

にかゝる。此の峠には長いトンネルがあつて、其のあたりは海拔約千八百尺、北海道鐵道沿線中の最高所である。汽車は密林の間をあへぎく通り抜けて、やがてトンネルにはいる。しばらく暗黒の中を通つて再び光明の世界に出た時、突如として眼前に展開せられた風景は、雄大といはるか豪壯といはるか、恐らく全道第一の壯觀であらう。右手には遠く日高境の山々が大浪のやうに連なり、眼下には廣々とした十勝の大平野がはるばると續いて、末は青い大空に接してゐる。汽車は無人の境を曲折して下る。晝がけるが如く美しき山の、或は

峯 條

右に或は左にあらはれるのは、サホ口嶽だけの連峯の一つであらう。はるかの下に一條の白煙をたなびかせて見えがくれする上り列車は、ちやうどおもちやのやうに見える。

十勝の平原

十勝川の流域一帯の廣野はいはゆる十勝平原で、其の中心をなすものは帯廣の町である。明治十六年こゝに十三戸の農家が移住して來たのが此の町の始りであつた。當時此のあたりは未開の原野で、殆ど交通の便もなく、唯僅かに十勝川を上下するアイヌの丸木舟の便

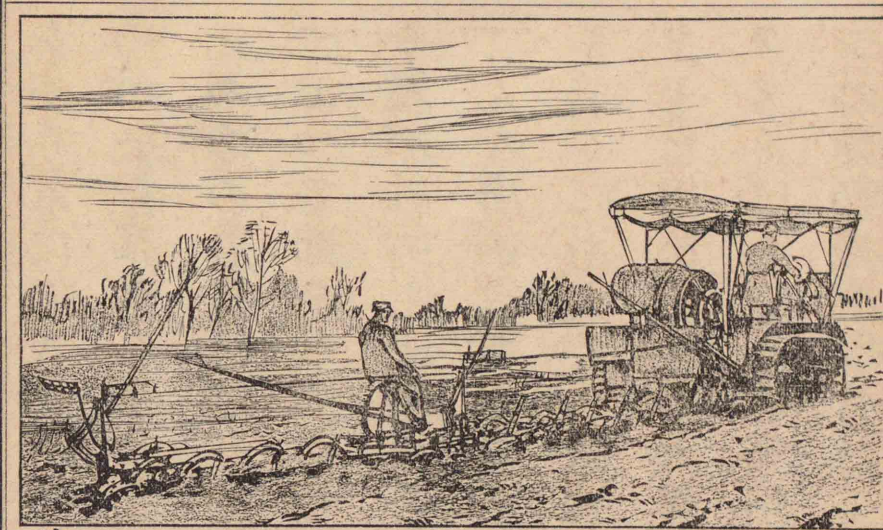
殆 僅

をかりるに過ぎなかつた。それが今は人口約二萬、戸數約四千を算するりつばな町となつたのである。

此の邊の農業は總べて規模が大きい。畠にしても、小路によつて細かく仕切ることをしてしないから、一枚の畠でうねが五町も十町も長々と續いてゐるのが少くない。こんな廣い畠であるから、耕すにも、うねを作るにも、種を蒔くにも、大てい機械と馬の力による。中にはトラクターを用ひて全く大農式にやつてゐる處もある。トラクターはちやうど軍用のタンクのやうな形で、ガソリンの發動機が取付けてある。これが大きな鋤すきを何本も

株

習



引いて、ものすごいなり声を立てながらのそりくくと歩き廻ると、二間幅ぐらゐに耕されて行く。又開墾する場合には、立木や切株の根本を掘つておいて、それにくさりをつけて此のトラクターで引くと、めりくと音を立てて根こぎにされてしまふ。

農業者は多く古い習慣になつ

識

吸

みやすいものであるが、此の邊では新しい知識をいれて、新式の農具を用ひ、新式の方法によつてどしく土地を開いて行く。はてしなく續く廣野の中で、人々は自由な大氣を呼吸しながら、土の香に親しんで楽しげに働いてゐる。

十勝の平野は心ゆくばかり晴々しい處である。

第十五課 人と火

人は火を用ひる動物。といはれてゐるやうに、火を使用するのは人類ばかりで、他の動物には見られない所である。

落 樹 智

一體人は最初どうして火を得たであらうか。思ふに落雷の爲に樹木が燃えたり、密生した樹木の枝と枝がすれあつて起つたりした自然の火から、火種を取つたものであらう。其のうちだんく、人智が発達するにつれて、木片と木片をこすりあはせて火を得る法をささとりやうになつた。

それから少し進むと、石や金を打合はせて火を出す法を考へるやうになつた。此の方法は各國民の間に、廣く又極めて長い間行はれてゐたものであるが、マツチの使用が廣まるにつれてすたつて來た。マツチは今から

燃

約百年前に發明されたものである。

火の熱は、初め主として食物を調理するのに用ひたもののやうであるが、時代が進んで燃料の種類が増すにつれて、火の用途もだんく廣くなつて來た。木炭や石炭や石炭ガスの火は、部屋を暖めたり物を煮たりするに用ひられ、石炭の火は木炭の火よりずっと熱度が高いので、汽車や汽船や工場の重い機械を動かすのに大切なものとなつてゐる。

燈火としては、初め松の木や魚獸の油などをたいたのであつたが、其の後らふそくや種油がともされ、石油ラ

完

ンプやガス燈が之に代り、今は電氣を利用した電燈が使はれるやうになつた。かくして人は、暗い世界からだんだん明るい世界へと、みちびかれて來たのである。必要は發明の母である。人は生活上の必要から發火法を工夫し、燃料を研究し、熱と光とをあらゆる方面に利用することを考へて來た。しかし熱や光の作り方や利用の方法は、決してこれで完成したといふわけではあるまい。將來は又どんなものが發明されるかも知れない。

第十六課 無言の行

閉 消燈

或山寺で、四人の僧が一室に閉ぢこもつて、七日間の無言の行を始めた。小僧一人だけ自由に室内に出入させて、いろくゝの用を足させた。

夜が更けるにつれて燈がだんくゝ暗くなり、今にも消えさうになつた。末席に坐つてゐた僧は、それが氣になつてしかたがない。うっかり口をきいてしまつた。

「小僧、早く燈心をかきたててくれ。」

隣に坐つてゐた僧が之を聞いて、

「無言の行に口をきくといふ事があるか。」

第二座の僧は、二人とも規則を破つたのが不快でたま

らない。

「あなたがたはとんでもない人たちだ。」

三人とも物を言つてしまつたので、上座の老僧がもつたいらしい顔をして、

「物を言はないのはわしばかりだ。」

第十七課 松阪の一夜

本居宣長のりながは伊勢いせの國松阪の人である。若い頃から讀書がすきで、將來學問を以て身を立てたいと、一心に勉強してゐた。

或夏の半ば、宣長はかねて買ひつけの古本屋に行くと、

主人は愛想よく迎へて、

「どうも残念なことでした。あなたがよく會ひたいと御話しになる江戸の賀茂かもまぶち眞淵先生が、先程御見えになりました。」

といふ。あまり思ひがけない言葉に宣長は驚いて、

「先生がどうしてこちらへ。」

「何でも山城やまと大和方面の御旅行がすんで、これから參宮をなさるのださうです。あの新上屋しんじやうやに御泊りになつて、さつき御出かけの途中何か珍しい本はないかと、御立寄り下さいました。」

泊

「それは惜しいことをした。どうかして御目にかゝりたいものだが。」



「後を追つて御いでになつたら、大てい追ひつけませう。」

宣長は大急ぎで真淵の様子を聞きとつて、後を追つたが、松阪の町はづれまで行つても、それらしい人は見えない。次の宿のききまで行つてみたが、やはり追ひつけなかつた。宣長は

訪



力を落して、すごくともどつて來た。さうして新上屋の主人に、萬一御歸りに又泊られることがあつたら、すぐ知らせてもらひたいと頼んでおいた。

望がかなつて、宣長が真淵を新上屋の一室に訪ふことが出來たのは、それから數日の後であつた。二人はほの暗い行燈あんどんのもとで對坐した。真淵はもう七十歳に近く、いろくりにつばな著書もあつて、天下に

才 尋

聞えた老大家。宣長はまだ三十歳餘り、温和なひと、なりのうちに、どことなく才氣のひらめいてゐる篤學とくの壯年。年こそちがへ、二人は同じ學問の道をたどつてゐるのである。だんく話してゐるうちに、眞淵は宣長の學識の尋常でないことをきとつて、非常にたのもしく思つた。話が古事記のことに及ぶと、宣長は

「私はかねぐゝ古事記を研究したいと思つてをります。それについて何か御注意下さることはございませうまいか。」

それはよいところに氣がつかしました。私も實は我が

希

葉

努

國の古代精神を知りたいといふ希望から、古事記を研究しようとしたが、どうも古い言葉がよくわからないと十分なことは出来ない。古い言葉を調べるのに一番よいのは萬葉集です。そこで先づ順序レイヤとして萬葉集の研究を始めたところが、何時の間にか年をとつてしまつて、古事記に手を延ばすことが出来なくなりました。あなたはまだお若いから、しつかり努力なきつたら、きつと此の研究を大成することが出来ませう。たゞ注意しなければならぬのは、順序正しく進むといふことです。これは學問の研究には特

に必要ですから、先づ土臺を作つて、それから一步一歩高く登り、最後の目的に達するやうになさい。」
夏の夜は更けやすい。家々の戸はもう皆とぎされてゐる。老學者の言に深く感激した宣長は、未來の希望に胸ををどらせながら、ひっそりした町すぢを我が家へ向つた。

其の後宣長は絶えず文通して眞淵の教を受け、師弟の關係は日一日と親密の度を加へたが、面會の機會は松阪の一夜以後とうく來なかつた。

宣長は眞淵の志をうけつぎ、三十五年の間努力に努力

滅

貨

幣

を續けて、遂に古事記の研究を大成した。有名な古事記傳といふ大著述は此の研究の結果で、我が國文學の上に不滅の光を放つてゐる。

第十八課 貨幣

我々の普通に金錢といつてゐる物の中には、金貨を始め、銀貨、白銅貨、青銅貨がある。これらを總べて貨幣といふ。又此の外に貨幣の代りに用ひられる紙幣がある。我々はこれらの貨幣や紙幣を用ひて物品を賣買し、其の他いろくくの用を辨じてゐる。我々は殆ど貨幣紙幣なくして一日も生活することは出來ぬといつてもよい

考

布

くらゐである。
此のやうに便利なものも、其の使用に馴れきつてしまつてゐる我々は、これについて事新しく便利を感ずることもなく、又之を考案した昔の人々に對して別段感謝の念を起すこともない。しかし今日の貨幣や紙幣を案出するまでには、人間は實に種々様々なものを使用して見たのである。

石貝家畜獸皮布農産物などが、時代により場所によつて、それ／＼貨幣の役目をしたこともあつた。しかしこれらの物は、受取る者にそれが不用であつたり、思ふや

割 缺

うに分割することが出来なかつたり、其の他いろいろの缺點がある。それで金屬を用ひることを思ひつき、形の上に種々の工夫をこらして、遂に今のやうな貨幣を造つたのである。かうして出来た貨幣は極めて使用に便利ではあるが、尚場合によつては持運びに不便なので、更に貨幣の代りになる紙幣といふ物を案出した。今では世界各國、貨幣紙幣を用ひない國はないのである。

第十九課 我は海の子

(一)

我は海の子、白波の

浴

さわぐいそべの松原に、

煙たなびくとまやこそ、

我がなつかしき住家なれ。

(二)

生れて潮に浴して、

浪を子守の歌と聞き、

千里寄せくる海の氣を

吸ひてわらべとなりにつけり。

(三)

高く鼻つくいその香に、

操

百尋

不斷の花のかをりあり。

なぎさの松に吹く風を、

いみじき樂と我は聞く。

(四)

丈餘のろかい操りて、

行手定めぬ浪まくら、

百尋千尋海の底、

遊びなれたる庭廣し。

(五)

幾年こゝにきたへたる

腕堅

鐵より堅き腕あり。

吹く潮風に黒みたる

はだは赤銅さながらに。

(六)

氷

浪にたゞよふ氷山も、

來らば來れ、恐れんや。

海まき上ぐるたつまきも、

起らば起れ、驚かじ。

(七)

いで、大船を乗出して、

護

我は拾はん、海の富。

いで、軍艦に乗組みて、

我は護らん、海の國。

第二十課 遠泳

今日は始めての遠泳だと思ふと、何だかうれしいやうな心配なやうな氣がする。

空には眞夏の日がきら／＼とかゞやきわたつてゐる。

砂の上を歩いて行くと、足の裏が焼けるやうだ。

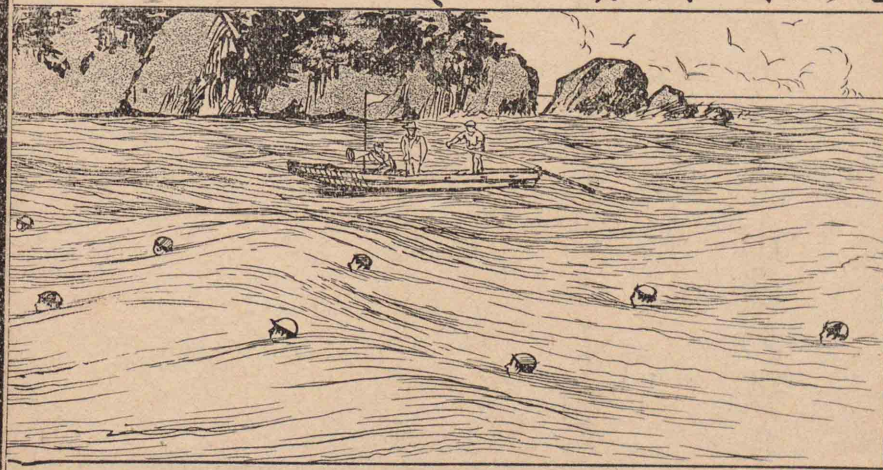
手や足の關節を曲げたり延ばしたりして、出發の號令を待つ。

曲

泳

やがて「進め」の號令と共に、三十人の一組は二列になつて、順々に水の中へとはいつて行く。今日は殊に波も静かだ。此の分ならば五海里や十海里は何でもない。

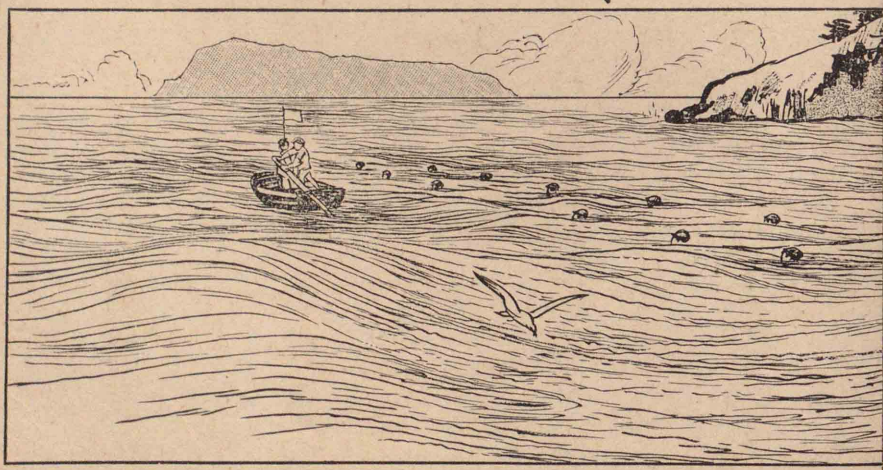
だんく、沖の方へ進んで行くと、水の色はものすごい程濃い紺色だ。波も追々大きくなつた。ふと見ると、さしわたし六七寸もある大きなくらげが、ふわりくくと浮いて



てゐる。

竹島を越したと思ふと、急に水が冷たくなつた。何だか氣持の悪いものだ。しかし又しばらくすると、もとの水の温度にかへつた。

手足が大分くたびれて來た。腹もすいた。その中、先に進んでゐた者が二三人列から離れて船に上つた。僕も急に元氣がなくなつて、一所に船に上らうかと思つたが、い



や、こゝががまんのしどころだ。そんな弱いことではだめだ。と、自ら勵まして進んで行つた。しかし月島はなかなか來ない。

やうやく月島の横を通り越す頃には、もうつかれきつて氣も遠くなるばかりだ。

「しつかりやれ。もう少しだ、もう少しだ。」

船の上からはしきりに勵ましてくれる。これに力を得て、又一しやうけんめいに泳いで行く。

目ざす大島はもうそこに見える。波打際には大勢の人が旗を振つたり帽子を振つたりして、「萬歳々々」と叫ん

でゐる。

とうく大島についた。

「あゝ五海里の海上を僕も泳ぎきることが出來たのだ。」

かう思ふ瞬間、つかれも何も忘れてしまつて、僕も思はず「萬歳」と叫んだ。

第二十一課 曆の話

夕食をすましてから、縁がはへ出て涼む。父は空をながめて、

「大層天氣がおだやかになつたね。二百十日もこれで

團扇

無事にすんだ。

と、團扇を使ひながら言つた。すると弟が

「おとうさん、二百十日は立春から二百十日目に當るのですね。」

と言つて、日数を數へてみようとした。父は曆を持つて來て、

「これは略本曆だ。この中にある『通日』で數へて御らん。これは一月一日から數へた日數だ。」

かういつて弟の手に渡した。弟はそれを見てしばらく考へてゐたが、すぐ二百十日の通日から立春の前日の

曆略 曆

通日を引去つて、

「成程、二百十日目だ。」

弟は尚あちらこちら曆をくつてゐるうち、ふと「十八夜の文字に目を止めて、

「こゝに『八十八夜』とありますが、これは何ですか。それも立春から數へると八十八日目、稻をはじめ

紀 祭

大ていの物の種をまく目安になる日だ。」

僕はこれまで曆といふと、今年は何元何年であるか、何月何日は何曜日であるか、祝祭日土用彼岸入梅日食月食が何時になるかといふやうな事を見るものとはかり考へてゐたので、此の話を聞いて珍しく感じた。父はなほ言葉をつづけて、

「曆を見れば、まだいろく大切な事がわかる。此の頃の日の出や日の入は何時だらう、満月は何日頃だらう。こんな事を知るには『日出』『日入』『月齡』を見る。おとうさんが毎年潮干狩によい日を選ぶのも『月齡』を見て

齡

知るのだ。」

父は更に

「もつとおしまひの方をあけて御らん。各地の氣候といふ所がある。そこを見ると、臺灣や樺太からやとのやうな遠い所の氣候までも大體分る。それから雨雪の量は何處が一番多いか、又一年中で何時頃が一番多いか、こんなことも記してある。もつとくはしいことは本曆を見るがよい。かういふやうに、曆はわたしたちに日ひの事を教へてくれる大切なものだ。」

僕はよく年寄の人が新の幾日とか舊の幾日とかいふ

陰

のを思ひ出して、其の事を父に尋ねた。父は

「新は新曆、舊は舊曆のことだ。曆には太陽曆と太陰曆とあつて、日本では明治五年まで太陰曆を用ひてゐたが、其の翌年から太陽曆を用ひた。それから太陰曆を舊曆、太陽曆を新曆といふやうになつた。」

「どうして太陽曆を用ひるやうになつたのですか。」

「太陽曆の方がよく季節にあつて都合がよいからだ。太陽曆は春分から春分までを一回歸年といつて、それを本としてこしらへたものだ。其の間は約三百六十五日と四分の一だが、便宜上三百六十五日を一年

とし、普通四年毎に一日の閏うるふをおくことになつてゐる。ところが太陰曆は月のみちたりかけたりする變化を本としてこしらへたもので、通例十二箇月を一年とするが、此の一年は一回歸年より約十一日少いから、太陽曆とくひちがつて來て、三年にならないうちに一箇月の閏をおかなければならない。したがつて二百十日も太陽曆なら大がい九月一日で、ちがつても一日ぐらゐのものだが、太陰曆になると三十日もちがふことがある。櫻の咲く季節でも霜の降る季節でも、やはりさうである。こんな不便な曆でも長い

間の習慣で、今でも使つてゐるものがあるやうだ。最後に父は

「曆は實に重寶なものだ。こんな重寶なものがあるのに、それを利用しないでゐるのは寶の持ちぐされだ」と言葉をそへた。

第二十二課 リンカーンの苦學

アメリカ合衆國第十六代の大統領リンカーンは、今から百年餘り前、ケンタッキー州の片田舎の貧しい家に生れた。

リンカーンが七歳の時、一家はインディアナ州に移つた

雜

が、さしあたり家がなくてはならぬので、父は自分で木を切出して小さな家を造つた。それは三方が丸太の壁で、一方は明けはなしになつてゐて、戸も窓も床もないものであつた。家が出来てから次に土地を開きにかゝつた。リンカーンは其の頃からもう父の手助をしなければならなかつた。父が木を伐れば自分は雜草をかり取る、父が畠を打てば自分は種をまくといふ風にかひがひしく働いてゐた。

一家の暮し向は誠にあはれなもので、食物なども自由には得られず、時には生のじやがいもしか食はれない

こともあつた。かういふ有様であつたから、リンカーンは十歳頃までは本を讀むことなどは殆ど出来なかつた。唯通りがかりの旅人から珍しい話を聞いては、僅かに心をなぐさめてゐた。

かうしてゐるうちに、知識を得たいといふ彼の欲望は益々強くなり、父に對して是非學校に入れてもらひたいと願つたけれども、父は學校へ行つて時間をつぶすよりも畠に出て働いた方がよいといつて、なかく許してくれなかつた。ところが母のとりなしで終に學校に入る事が出来たので、リンカーンの喜は一通りでない。

鉛

留

かつた。學校は四哩餘りも離れてゐたが、路の遠いのは少しもいとはず、毎日毎日元氣よく通學した。鉛筆や紙も自由には買へなかつたから、家で算術の練習をするには、木のシャベルと炭を用ひた。シャベルが數字で眞黒になると、それをふいては又書く。大事なことは拾ひ集めた木片などに書留めて



優

忘れないやうにしておく。かういふ心掛であつたから、成績は何時も優等であつた。

しかしせつかく始めた學校通ひも、家事のために僅か一年足らずで止めねばならなくなつた。それから父の手助をしたり、人にやとはれたりすることになつたが、本を讀みたいといふ心は少しも變らなかつた。ところが家に書物がないばかりでなく、近くに圖書館もないので、どうしても人から借りて讀む外はなかつた。熱心なリンカーンは、書物を持つてゐる人の所には遠近を問はず借りに行つた。さうして其の本の内容がす

史

つかりわかつてしまふまでは何度でも讀む。かうしてイソップ物語やロビンソン、クルーソーや合衆國史等を讀んだ。

鬼 就 激

或時近邊の人からワシントン傳を借りたことがある。リンカーンはかねぐ、此の偉人を非常にしたつてゐたので、鬼の首でも取つた氣になつて一心に讀續けた。晝の仕事の合間に讀むのは勿論、夜は床に就いてから燈が盡きるまで讀む。燈が盡きると翌朝すぐ手に取れるやうに、まくらもとの壁際に置く。ところが或夜、夜中に激しい雨が降つたことがある。リンカーンがふと目

覺

を覺した時はもう遅かつた。壁のすき間をもつた雨のため、本がすつかりぬれてゐたので、子供心にも大變心配して、其の晩はとう／＼眠れなかつた。翌朝貸してくれた人の家に行つて事情を述べ、

「辨しやうすることが出来ませんから、其の代りに何か仕事をさせて下さい。」

と願つた。其の人は別にとがめもせず、願に任せて三日間畠の草をとらせ、さうして本は其のまま、リンカーンにやつた。リンカーンは其の本をていねいに乾かして、其の後何度も／＼讀返してゐるうちに、此の偉人の品

性に深く感化された。

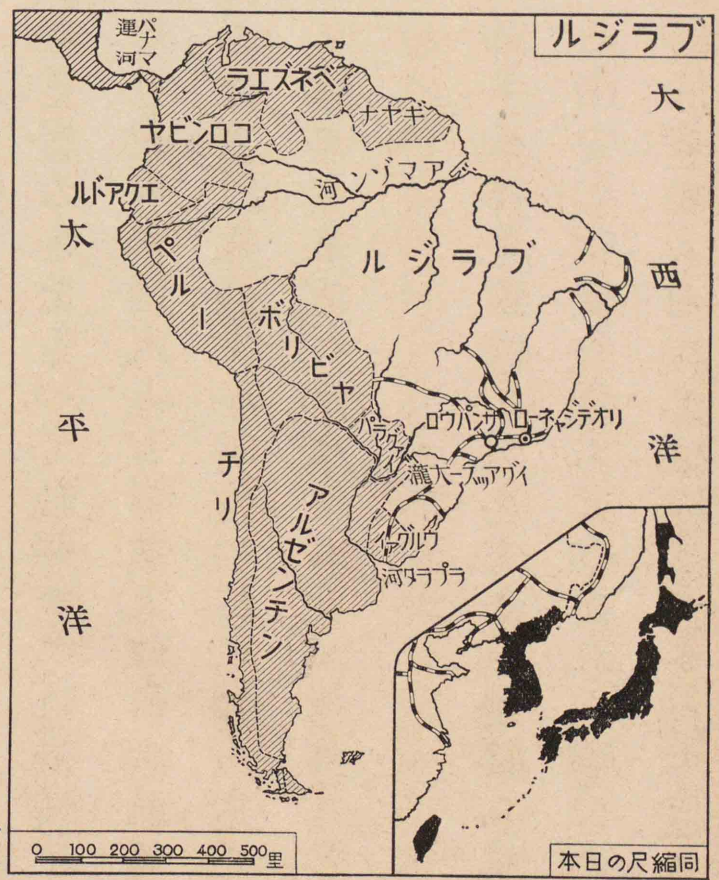
リンカーンは父の手助をして忠實に働くと共に、非常な熱心と努力とをもつて勉強を續けた。彼が他日大統領となり、世界の偉人として萬人に仰がれるやうになつたのは、實に此の少年時代の苦心のたまものである。

第二十三課 南米より(父の通信)

一

御手紙拜見致候。二人ともよく勉強し居らるる由、安心致候。勉強も大切なれど、體にも精々御注意なさるべく候。

ラジルの國の首府にて非常に景色よく、港としても有名なる處に候。町のりつばなる事も、文



はブ
口市
ネー
デ、
リオ、
中の
滞在
目下

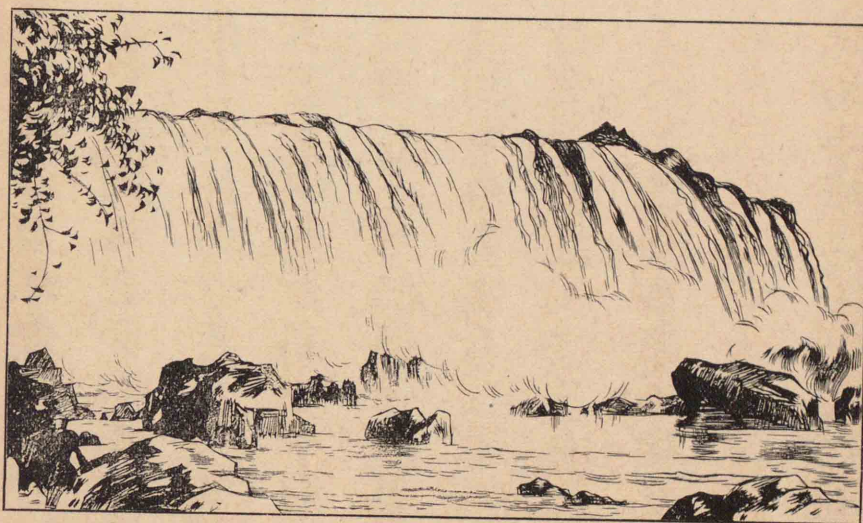
劣

明諸國の大都會に比して少しも劣る所これなく候。此のブラジル國は、廣さ我が國の十三倍もこれあり、其の大部分は熱帯に屬し居候へども、中央の高地や海岸地方の大半は割合に涼しく、殊に温帯に屬する南部の諸州にては、四季の變化も日本の如くはつきり致居候由、唯をかしきは日本の秋が春、日本の冬が夏といふ様に季節の相反する事に候。

二

此の手紙と一しよに、繪葉書をたくさん小包

瀑寫



にて送り申候。其の中に有名なるアマゾン河や、イグアスーの大瀑布の壯觀を寫したるものもこれあり候。アマゾン河は全長五千五百キロメートル、世界の河の王といはれ居候。河幅は驚く程の廣さにて、河口の處

略豊

舌

にては、三百二十キロメートルもこれある由、略、東京豊橋間の距離きよに當り候。次にイグアスーの瀧は、ブラジル國と隣のアルゼンチン國との境にある大瀑布にて、高さ五十五メートル、幅三千六百メートル、其の壯觀實に筆舌に盡くし難く候。

三

二週間ばかり前より西方のサンパウロ市に參り居候。此の邊は南米中、日本人の最も多く住める處にて、何處に行きても日本人を見か

在 甘 誘

け候は甚だ愉快に候。殊に日本人の小學校ありて、御前たちぐらゐの子供が通學し居るを見ては、殆ど身の南米に在るを忘れ候。世界に名高きブラジルコーヒーの主要なる産地も此の邊にて、甘蔗シヤ綿花米等もよく出来る由に候。昨日知人に誘はれてコーヒー園見物に出掛け候。大勢の人々が熟したるコーヒーの實を手にてこき落し、之を集めてみぞに投入れ候へば、まじりたる石砂などは沈み、實のみ浮びて流れ候を、下流にてすくひ上げ、之

視

を廣きほし場にて乾かし候。之を機械にかけて皮を除き、袋に入れて外國に輸出する由に候。

コーヒー園には多くの日本人が働き居候。中にも十三四ばかりの子供が、各國人の間にまじりてかひなく立働ける様を見ては、如何にもけなげに存せられ候。

四

森林地開墾コンの様子を視察致居候ため、しばらく無沙汰に打過ぎ候。

牛 茂

ブラジルは何處へ参りても果なき原野と森林とに候。原野は大てい牧場にて、牛馬は放し飼にせられ居候。森林には大木すき間もなく繁茂し、其の根本には、つる草、灌木くわんなど思ふまゝに



國十一

抱

はびこり居候が、る處にても日本人が盛に開墾に従事致居り、其の有様は如何にも男らしく勇ましきものに候。先づ柄えの長さ一間もあるなたにて灌木を伐拂ひ、次にをのを振るつて大木を伐るに、三抱も四抱もあるものが地ひびきを打つて倒る様、壯快言語に絶し候。伐倒したる木は乾くまで其のまゝに致置き、さて四方より火を放てば、天をもこがすばかりのほのほをあげて燃ゆる光景は、實にすさまじきものに候。燃え

あとは取片附けて畠とし、コーヒーわたの木
などを植付け申候。
ブラジルの視察も大體終り候間、程なく歸國
致すべく候。

第二十四課 孔明



雲 窓

白雲いうく去り又來る。
西窓一片殘月あはし。

顧 起

うき世をよそなるしづけき住居、
出でては日毎烟を打ち、
入りては机に書をひもとく。
雪降りみだる、冬をあしたに、
風なほ冷たき春のゆふべに、
劉備が三顧のこよなき知遇、
我が身をすてて報いんと、
起ちてぞ出でぬる、草のいほりを。

漢 帝

天下を定むる三分の計、

たなそこの上に指さすがごと。

いしず急固めし蜀漢の國、

漢中王はおごそかに

帝の位をふませ給ひぬ。

二代の帝に盡くす真心、

強敵ひしぎて世をしづめんと、

三軍進めし五丈原頭、

はかなく露と消えしかど、

露

其の名はくちせず、諸葛孔明。



第二十五課 自治の精神

我が國の地方自治團體には、府縣市町村の別がある。其の土地に廣い狭いがあり、其の組織に繁簡の差がある。にしても、地方自治の精神に基づいて其の團體の幸福

基

協致

を進め、國運の發展を期することは皆同じである。一體自治の精神とは何であるか。地方人民が協同一致して自ら地方公共の事に當り、誠意其の團體の爲に力を盡くす精神が即ちそれである。此の精神は實に自治の根本であり、又其の生命である。一般人民が府縣市町村會議員を選舉するにも、府縣市會で參事會員を選舉するにも、市町村會で市町村長を選舉するにも、皆此の精神を本としなければならぬ。又市町村長が其の事務を處理するにも、議員が豫算を議するにも、常に此の公平な精神をもつてしなければならぬ。

私

勸誘

市町村長や議員を選舉するには、専ら其の人物に重きをおいて、決して親族縁故、其他私交上の關係の爲に心を迷はすやうなことがあつてはならない。まして威力によつて強制するとか、私利によつて勸誘するとかいふやうな手段を用ひたり、又此の手段に動かされたりするのは、自治の精神に全く反するものである。本當に自治の精神に富んでゐる者は、公平無私、地方公職の爲の適任者を擧げることだけを考へて、決して私心をもたないのである。

吏

公吏議員等、直接間接に公共の事務に當る者は、如何に

辨旨

尊

慈善

其の職務に忠實であつても、一般の人民の後援がなければ自治團體の圓滿な發達を望むことは出来ない。それであるから人々は常に自治制の本旨を辨へ、協同一致して團體の福利を増進することを心掛けねばならない。例へば教育衛生等の自治團體の事業は、地方人民が一般に之を尊重し、之に協力することによつて、始めて其の効果を完全に擧げることが出来る。又産業組合を設けたり、慈善事業を起したり、又は青年團を組織して産業の發達、風俗の改善等に務めたりするのは、皆公共心の發動であつて、自治の精神を養成し、自治團體を

助長するものであるから、地方人民は大いにこれ等の事業に力を盡くさねばならぬ。

制度を運用するのは人である。自治制も、之を運用する人民に自治の精神が乏しければ、よい結果を得ることは到底望まれぬ。

第二十六課 ウェリントンと少年

昔イギリスの或大きな農場で、農場主が大勢の人の耕作するのを監督してゐた。

ふと向ふを見ると、銃獵れふに出たらしいりつばな騎馬の人たちが、眞一文字にこちらへかけて来る。農場主はせ

つかくよく出来てゐる麥を、たくさんの馬や犬にふみ
あらされてはたまらないと思つて、そばに居た自分の
子に、

「ジョージ、早く行つて農場の門をしめる。人が何と言つ
ても決してあけるな。」

と言ひつけた。

ジョージがとんで行つて門の戸にくわんぬきをさすが
早いか、騎馬の人たちはもう門の外まで乗りつけた。さ
うしてジョージに早くあけて通すやうにと言つた。する
とジョージは、

依

「皆さん、此處は通れません。僕はおとうさんから、誰が
來ても此の門をあけてはならないと言ひつけられ
てゐるのです。」

と言つてどうしてもあけない。騎馬の人たちは、あけな
いとなぐるぞと言つておどしたり、あけてくれ、ばお
禮に金貨をやると言つてすかしたりした。しかしジョー
ジは依然として、

「おとうさんは、誰が來ても此の門をあけてはならな
いと僕に言ひつけました。」

とくり返すばかりであつた。最後に目つきのやさしい

紳

老紳士が言った。

「私は公爵しやくウェリントンだ。よい子だから私の頼たのをきいてくれ。」

ジョージは、かねてウェリントン公爵が勲功も高く、りつばな人物であるといふ事を聞いてゐたので、帽子をぬいで恭しく敬禮して、さて静かに口を開いた。

「ウェリントン公爵ともいはれるえらいお方が、おとうさんの言ひつけに背けとおつしやらうとは、どうしても考へられません。僕は、誰が來ても此の門をあけてはならないとおとうさんに言はれてゐるのです。」

勲 恭 背

答

公爵はひどく此の答が氣に入つた。さうして自身も帽子をぬいで答禮し、一同を引連れて立去つた。

ジョージは後を見送つて、帽子を振りながら叫んだ。

「ウェリントン公爵萬歳。」

第二十七課 ガラス工場

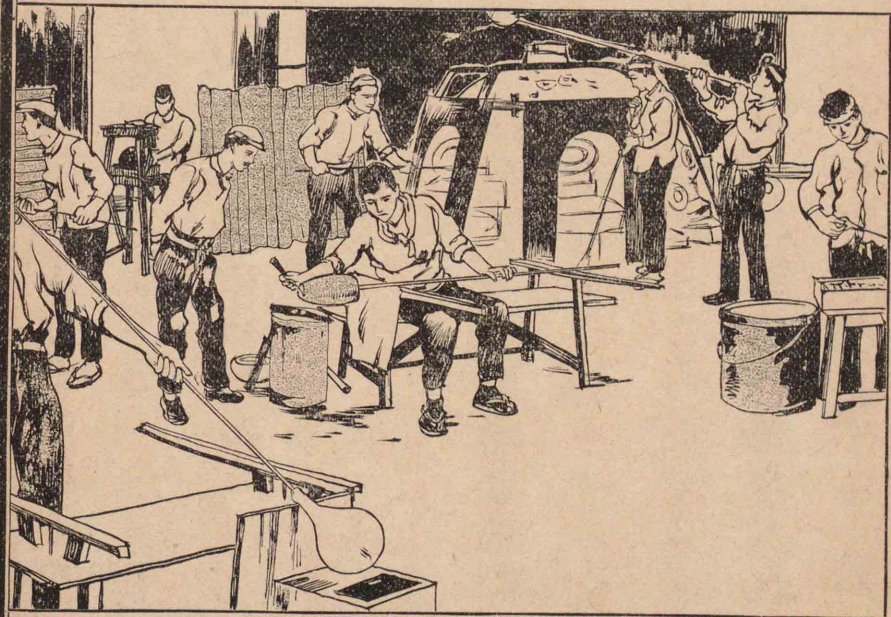
昨日橋本君と一しよに町はづれのガラス工場を見に行つた。

最初にはいつたのは原料を調合するところで、マスクをかけた職工が珪砂けいさにソーダ灰や石灰石の粉を入れてかきまぜてゐた。シヤベルでぎくぐくかきまぜると、白

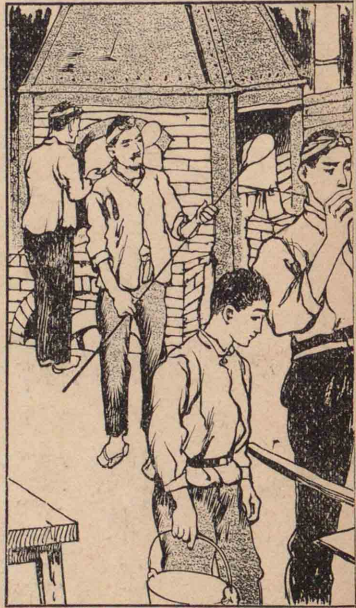
灰砂

い粉が一面に煙のやうに立ちのぼつて、目も口もあけられない。こんなところで毎日働いてゐる人たちは、どんなにつらいことであらうと思つた。

次の建物にはいると、こゝには熔解窯ようかいがまがある。とけたガラスが中でぎらくか



は、八九人の職工が汗を流して働いてゐる。細長い管の一端を、とけたガラスの中に突つこんで引出すと、



先に赤い玉がくつついてゐる。一端に口を當てて息を吹きこむと、ふうつとふくれる。ふり動かしては又吹く。いよく大きくなる。まるであめ細工のやうである。見てゐるうちに大きなフラスコが出来た。こちらを見る。と、そこではちよつと吹いて型かたに入れ、又吹いて型から出す。何が出来るであらうかと思つてゐると、いろいろ

扱つてゐるうちに臺付のコツプになつた。實にうまいものである。

橋本君にうながされて、次の室にはいつた。こゝは加工場である。調べかほの廻るにつれて、石や木や金の圓板が車輪のやうに廻つてゐる。エプロンをかけた職工がガラスの皿やコツプなどを、此の圓板にあてて模様をほりつけたり、みがきをかけたりしてゐる。隣の室では、職工が五六人ならんで、ガラス器にいろくゝの模様をつけてゐる。

歸りがけに事務所の陳列棚ちんを見せてもらつた。皿コツ

プをはじめ、鉢びん、花びん、水さしなどがきれいに並んでゐた。取分け美しかつたのは電燈の笠で、赤黄紫緑とりどりに目もさめるばかりであつた。

第二十八課 鐵眼の一切經

一切經は、佛教に關する書籍を集めたる一大叢書そつにして、此の教に志ある者の無二の寶として貴ぶところなり。しかも其の卷數幾千の多きに上り、これが出版は決して容易の業に非ず。されば古は、支那より渡來せるものの僅かに世に存するのみにて、學者其の得がたきに苦しむたりき。

寺 忍 成就



今より二百數十年前、山城宇治の黄檗山萬福寺に鐵眼といふ僧ありき。一代の事業として一切經を出版せん事を思ひ立ち、如何なる困難を忍びても、ちかつて此のくはだてを成就せんと、廣く各地をめぐりて資金をつのる事數年、やうやくにして之をと、のふる事を得たり。鐵眼大いに喜び、將に出版に着手せんとす。たま〜大阪に出水あり。死傷頗る多く、家を流し産を失ひて、路頭に迷ふ者數を知らず。鐵眼此の

喜捨 救 悉

狀を目撃して悲しみにたへず。つらく思ふに、我が一切經の出版を思ひ立ちしは佛教を盛にせんが爲、佛教を盛にせんとするは、ひつきやう人を救はんが爲なり。喜捨を受けたる此の金、之を一切經の事に費すも、うゑたる人々の救助に用ふるも、歸する所は一にして二にあらず。一切經を世にひろむるはもとより必要の事なれども、人の死を救ふは更に必要なるに非ずや。とすなはち喜捨せる人々に其の志を告げて同意を得、資金を悉く救助の用に當てたりき。苦心に苦心を重ねて集めたる出版費は、遂に一錢も残

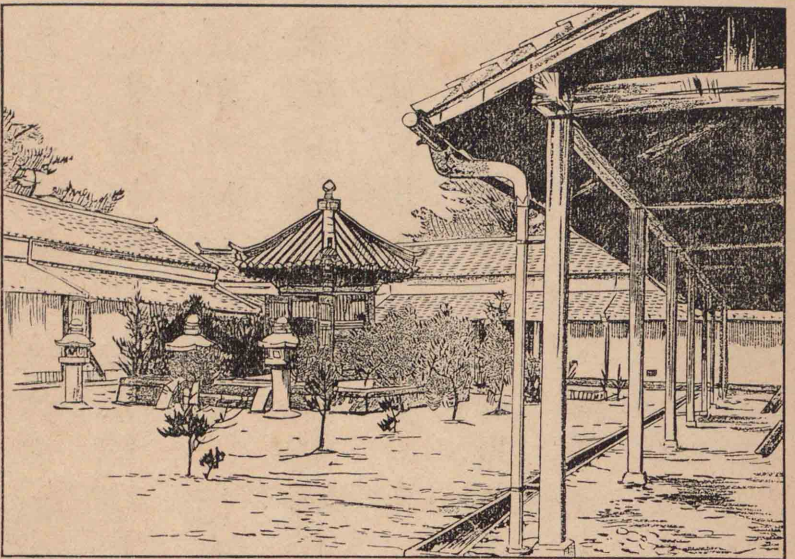
志

らずなりぬ。然れども鐵眼少しも屈せず、再び募集に着手して努力すること更に數年、効果空しからずして宿志の果さるゝも近きにあらんとす。鐵眼の喜知るべきなり。

幕

然るに、此の度は近畿地方に大飢饉起り、人々の困苦は前の出水の比に非ず。幕府は處々に救小屋を設けて救助に力を用ふれども、人々のくるしみは日々にまさりゆくばかりなり。鐵眼こゝにおいて再び意を決し、喜捨せる人々に説きて出版の事業を中止し、其の資金を以て力の及ぶ限り廣く人々を救ひ、又もや一錢をも留め

奮



ざるに至れり。

二度資を集めて二度散じたる鐵眼は、終に奮つて第三回の募集に着手せり。鐵眼の深大なる慈悲心と、あくまで初一念をひるがへさざる熱心とは、強く人々を感動せしめしにや、喜んで寄附するもの意外に多く、此の度は製版・印刷の業着々として進みたり。かくて鐵眼が此の大事業

刷

倉庫

を思ひ立ちしより十七年、即ち天和元年に至りて、一切經六千九百五十六卷の大出版は遂に完成せられたり。これ世に鐵眼版と稱せらるゝものにして、一切經の廣く我が國に行はるゝは、實に此の時よりの事なりとす。此の版木は今も萬福寺に保存せられ、三棟百五十坪の倉庫に満ちくたり。

福田行誠ぎやうかいかつて鐵眼の事業を感歎していはく、鐵眼は一生に三度一切經を刊行せりと。

尋常小學國語讀本卷十一 終

昭和四年十一月五日修正印刷
 昭和四年十一月七日修正發行
 昭和四年十一月七日翻刻印刷
 昭和四年十一月三十日翻刻發行

著作權所有

著作兼發行者

文 部 省

尋常小學國語讀本卷十一

臨時定價金拾貳錢

翻刻發行兼印刷者

東京市小石川區久堅町百〇八番地²⁰
日本書籍株式會社

代表者 大倉保五郎

印刷所

東京市小石川區久堅町百〇八番地
日本書籍株式會社工場

昭和四年十一月二十日
文部省檢査濟

發賣所

東京市麴町區飯田町一丁目三番地
株式會社 國定教科書共同販賣所

広島大学図書

2500027884

